

そして彼らの苦悩は続く。「探検」は、夢からさめた時、とりとめもない海の深みへ彼らを引きずり込む。即ち、「探検部」を続けていく時の自分の生活の意義を見失うことがあるからだ。私は思う。自分の今までやってきた事の客観的な、一般的な高さを問題にするのではなく、自分の本質、自分に賦与されたものを、生活と行為の中で、できるだけ完全に、純粋に表現してゆくことが大切なのではないか、と。

しかし、個人と組織の問題は、さらに複雑だ。組織は、個人をその一部としての地位に、あてはめようとする。もし我々が自由を大気として呼吸して生きてゆこうとするのであれば、その組織化は、さわめて多くの矛盾を、引きおこすであろう。

そうでなくても、各人は各人の世界観、人生観を持っているから、同一の探検を志すことは、個人と個人との妥協が前提となる。畢竟、人は誰でも自分の世界を持っていて、それを他の人と共に

することはできない。

このように個人と組織とは、水と油のように混りあわないものかもしれない。しかし「探検部」を、成立せしめるためには、個人の意見を十分に組織の運営のうえに、反映させること、それを十分に受け入れる組織であること、が必要である。

少なくとも、これらの「探検部」の組織には、新人の意見を十分に、発表し、部員相互の意志の疎通が、行えるような、リラックスした場が必要である。そして、その場こそが、すべての会議に優先した場であるべきである。新人の胸中には、「探検部」という組織が、O・Bと、執行部によってのみ、どこか分からぬところへ行ってしまうような不安があるのだ。こうした不安が、組織への不信感へととなって行くように思える。

新人と言えど、「探検」と「組織」に対し、批判的態度を常に持つことは、「探検部」の発展にとって無くてはならないことだと思う。

山ぐるい，山ぐるい

倉谷明子

今日も、私の両肩から大きくはばかり出ているザックを背負って家を出る。母のあきらめ顔と、世の人々の、まるで奇怪な物でも見るような視線を受て、居直って街中を歩いてやる。私は山に行くのです。

4月の末に入部して以来7ヶ月、入山日数も70日を越えようとしているんだなと思いつつ、その

時の早さに、あらためておののく。母にいわせると、私は山キチガイの域を脱したそうである。もう山バカ、もしくは山アホの境地であるらしい。この頃は、私に山を教えた叔母までが電話口でぼやく始末。事実、私にだって予想できなかった。これほど山狂いになろうとは。絵が好きで、歌うことも大好きな母がそう願っていたような普通の

女の子だった。(今だって平凡だけれども)、突如変身したわけでもない。ただ私がほんとうに打ち込めるものが欲しかった。……でも、そんなこともどうだっていい。今、私は山が大好きなのだから。

私が5kgの荷物を重い重いと感じながら、赤いリュックで山につれて行かれた頃、山はその美しさを私の前にさらけ出した。緑々した原、雪溪、青すぎるほどの空、霧の日も、朝焼の針ノ木岳も新鮮で強烈な印象を私の心に残していった。やがて私がキスリングなるもので山を歩きはじめた頃山はその大きさを思い知らせた。こんなに苦しい思いして二度とくるものかと思い、そのつらさに幾度も足をとめかけた。それでも雪の白馬連山に強く心引かれた私は、いつかあのような白い頂に立ってやるのだと思うようになった。今、山は私にその深さを教えてくれる。いくら求め続けても終わりのない。岩をよじり、沢を溯る。靴しか知らない足にアイゼン、ピッケルなる長物をにぎりしめ歩く雪道、ただ山はあいかわらず大きく冷やかだ。いつだってもうこんな苦しみからのがれたいと、そんなことばかり思い起させる山である。そして山はあいかわらずきれいだ。

いつも背のびばかりしてるんじゃないかと考え込む。ほんとうに私の力に即しているのだろうか。これが私自身の山登りなんだろうか。そんなことが、がむしゃらに動いている私のスキをねらってフット心のすみにわいてくる。受験勉強に取り組んでいた頃、私はしきりと今後の山行について考えていた。山岳部に飛び込んで、正味無我夢中で過した高校の1,2年を思ったとき、私はもうこんな激しい(その頃の私にとっては、精いっぱい)の山行であったから)山はやめるのだと感じ、私だけの力でできる山を、のんびり続けたいと思っていた。そんな山行は、心の底までなごやかにして

くれる響を、今も持っているのだが。ましてウィンパーテントで寝ることなどもう二度とないことだと思っていたのである。しかし大学生活とそんな山行が、爪先から脳天までの緊張感と集中力を少しでも知っている私にとって、満足でないことを感じ始めた。肉体的にも、精神的、社会的にも、特に女である私にとって、この4年間しかないのではないかと思い、やはり無我夢中すぎるぐらいの時間が欲しかった。

いつも、私の山登りには、たとえばヒマラヤの巨峰に挑むのだなどという大きな夢はない。単なる夢はどこまでも広がるけれど、現実化させるものはない。それでも私の山は常に進歩してきたと思っている。この次はという目標を求め続けているからかもしれない。そして探検部に入部した当初、夢は冬山にあった。雪の山は知っていても、いまだ知らない厳冬期の山々。それは高校時代に見た、あの精悍で美しい雪の連山に憧れているせいだろうし、今までよりもっともっと過酷であるはずの冬山に私をぶつけてみたい。どこまでやれるのかためしてみたい。そんな思いであるのだと思う。

倍数以上いた一回生が5人になってしまい、私もその生き残り組の一人であるが、今だこのクラブを続けてゆけるという自信はない。ただ、いつも自分のBestで事にあたりたいと思う。まったくBestに近づき、一致してしまったときまだそれ以上のものが必要であれば、私はやめなければならない。でもその時はきっとさわやかであると信じるのである。

とにかく今、私の目前には冬山というものが立ちはだかっている。夢が現実として今冬、私を待っているのだ。これをのりこえれば、また次の小さな目標に向かって進んでいきたい。そして、探検部紅一点であるよりも、来春になり、私よりも

もっとキチガイ的な女の子が入部してくることを 望むものである。

洞窟班の流れ

八 木 秀 樹

44年に奴奈川洞で大惨事に会い、その雪辱戦とも言ふべき第7次青海洞窟群調査を45年8月奴奈川洞再アタックという形で試みた結果、入洞期間3日間という驚異のスピードで、奴奈川洞の全貌を、我々の前に引きずり出した。千里洞においては、第5次調査隊でようやく最深部に到達している。これは、何を意味しているのかと言えば千里洞において、ほとんど竖穴技術に関しては、第1次より始めたと言ってもよい、そして、千里洞がその技術の練磨の場として、又竖穴洞窟探検の限界は如何にといったふうに、たえず第1次～第5次調査隊において、我々洞窟班に対する問いかけである。そして千里洞が我々に与えた諸々の試練を我々が面と向ってぶつかり、これを克服してきた。この行為が我々に対し、歴史の重みとしてほぼ完璧なまでの竖穴技術を残していった。そのことが奴奈川洞を、ああも短期間で、終えさせた最大の原因である。このことは、46年度の銀鳳洞の第一次調査隊で-330mの最深度に到達していることをみても明らかであろう。そういった観点より、洞窟班の歴史は、およそ3つに分けられるのではないだろうか。すなわち第1期として35年滋賀県多賀町河内風穴洞に始まり千里洞が始まるまで、そしてこの第1期後期の態石洞をワンステップとして、第2期に入る。第2期は千里

洞東1次～第5次調査隊40年～43年である。そして第3期として第2期の千里洞が、我々に残したものをフルに生かしマイコミ平解明に拍車がかけられた時期であり、奴奈川洞、銀鳳洞を経て47年の沢穴、白蓮洞と続くのである。

第3期の特徴は、銀鳳洞をやり終えた時、隊のメンバーは、すでに千里洞にたずさわった人間もなく、ただ竖穴入洞技術もフィールドも歴史の重みとして我々の目の前にあるだけである。そしてそこには何ら創造主体としての自らのフロンティア精神の発揮する余地が残されていなかった。そして、自らがフロンティアであることを放棄することであるという観念が誰言うとなしに、班員全体をおおった。そういった自覚が千里洞の流れの終りでもあり、第3期の始まりでもあった。

すなわち、行動として46年の八ヶ岳厳冬期登サポート、青海マイコミ平積雪期偵察といったふうに表われた自覚が、具現化されつつある。今後こういった方向といったものがさらに、延長され、また、それにともなう困難を克服していく過程が、来たるべき、第4期をよりすばらしく、よりあるべき姿として、洞窟探検の可能性を、押し開いていくことであろう。

(工学部3回生)